

そのころ、与次右衛門は、一さつの本を手に入れました。それは、昔中国の王禎おうていという人が書いた『王禎農書おうていのうしよ』という本です。初めてみる農業の本に感心しながら、夢中になって読んでいくと、会津の農業にはあわないところが、だんだん目につくようになりました。それに、むずかしい漢字ばかりを使った中国の文章ですから、なかなか読みとれないところもありました。

しかし、農業の本のまとめ方は、たいへん勉強になりました。

「そうだ。これを参考にして、だれにでもわかることばで、この会津の土地にあった農業のやり方を、書き残すことのできるのは、自分しかない。自分がいなければ、だれもできないのだ。」

与次右衛門は、こう考えると、決意が強くなっていくのを感じました。

会津の片いなかで、与次右衛門が書きはじめたころ、世の中は五代將軍綱吉つなよしが位くらゐにつき、はなやかな元禄時代げんろくがやってこようとしていました。